

## 2. 人文科学研究科

I	人文科学研究科の教育目的と特徴	2-2
II	「教育の水準」の分析・判定	2-4
	分析項目 I 教育活動の状況	2-4
	分析項目 II 教育成果の状況	2-24
III	「質の向上度」の分析	2-33

## I 人文科学研究科の教育目的と特徴

### 1 人文科学研究科の基本的な目標等

富山大学の理念及び中期目標における基本的な目標は以下のとおりである。

表A 富山大学の理念

富山大学は、地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、人間尊重の精神を基本に高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化、人間社会と自然環境との調和的発展に寄与する。

(出典：富山大学概要)

表B 富山大学中期目標における基本的目標

富山大学が全学的に重視する目標は、教養教育と専門教育の充実を通じて、幅広い職業人並びに国際的にも通用する高度な専門職業人を養成することである。本学の特色は知の東西融合を目指すことにあり、この点を生かしつつ、地域と世界の発展に寄与する先端的な研究を推進する。そして、東アジア地域をはじめ諸外国の教育研究機関と連携しつつ、国際的な教育・研究拠点となることを目指す。また、地域と時代の課題に積極的に取り組み、社会の要請に応える人材を養成し、産学官の連携と地域への生涯学習機会の提供などを通じて、地域社会への貢献を行っていく。

(出典：富山大学中期目標)

人文科学研究科では、この目標を達成するために、表Cのような基本理念と表Dに掲げた教育研究上の目的を定めている。

表C 人文科学研究科の基本理念

広くかつ深く身につけた高度の人文科学的教養を背景に、深い人間理解の能力を持ち、視野が広く見識に富み、様々な課題に対処できる高度専門職業人として、さらに21世紀を生きる倫理観を備えた創造力に富む市民として、地域に根ざしながらグローバル化時代を自立して生きていく能力を持つ社会人の育成を目指します。

(出典：富山大学概要)

表D 人文科学研究科の教育研究上の目的

本研究科は、学部における一般的及び専門的教育を基礎として、より高度な専門的知識と広い学問的識見を身につけ、現代社会の諸要請に積極的に対応できる、職業的能力及び研究能力を有する人材を養成することを目的とする。

(出典：富山大学大学院人文科学研究科規則)

### 2 人文科学研究科の特徴（特色）

富山大学人文科学研究科は、高度の専門知識と広い学際的視野をそなえた人材を育成し、社会の文化的諸要請に応えることを目的に、昭和61年4月に設置（「日本・東洋文化専攻」と「西洋文化専攻」）。平成9年に、人文科学の諸分野における高度に専門的な、またこれらの諸分野にまたがる総合的・学際的な研究教育を通して、高度の専門的知識と広い学際的視野を備えた人材を養成し、新しい時代の要請に応えるために改組を行った（「文化構造研究」と「地域文化研究」）。更に平成23年4月、社会状況の急激な変化や学生の教育・研究の要請に対応し、多様な専門分野からなる教員を有効に活用し、きめ細かく柔軟な研究指導体制を構築するために、従来の2専攻から人文科学1専攻に改組した。多様な学生に対応するために、複数の教員による指導体制を取り、分野間・教員間の協力関係を可視化するために、研究の対象・素材・手法の親和性に留意して3領域（思想・歴史文化、行動・社会文化、言語文化）を設定し、その下に15教育研究分野を配置した。

人文科学研究科の特徴は以下の通りである。

- ① 入学定員は8人で、徹底した少人数教育が実施されている。大学院生研究室が4つあり、研究環境が整っている。
- ② 正指導教員の他、他研究科を含む副指導教員の指導が受けられ、学際性・総合性を備えた学修により、多様化・複雑化した、人間、文化、社会の諸相を、総合的に捉えることを可能にしている。
- ③ 各学問分野の基本概念や実験・調査の技能を修得しつつ、2年次に修士論文の作成を行う過程で、研究報告会、院生論集の自主的な編集・発行などの機会を設け、高度なプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力の養成を図っている。
- ④ 社会人の大学院生には、昼夜・休日開講や長期履修制度等を整備し、修学の便宜を図っている。
- ⑤ 留学生に対しては、日本語による論文作成能力を向上させるため、専門スタッフを配置してアカデミック・ライティングの個別指導を実施している。
- ⑥ 「東アジア」をキーワードに地域社会と連携し、かつ国際的視野に立った幅広い教育・研究の拠点づくりを行っている。

[想定する関係者とその期待]

## 1. 富山県下唯一の人文系高等教育機関としての役割

富山県下で人文学を学べる唯一の研究科として、富山県とその近県の学生等からの本研究科への期待は大きい。地域の自治体や企業からも、人文学に関する高い専門性を有しながら、幅広い視野を持ち地域社会に貢献できる人材の育成が期待されている。

## 2. 東アジア諸国との交流促進の役割

地元自治体や企業から、大学院で養った語学力や専門的知識、汎用的能力を基に、主に東アジア諸国やロシア等との交流を促進できる人材の育成が期待されている。また、これらの地域では、日本語教育のニーズが拡大しており、特に留学生の教育に関しては、日本理解や日本との交流促進に資する人材の育成が期待されている。

## 3. 希少な教育研究分野の維持・発展のための役割

本研究科は、1専攻15教育研究分野という多彩な専門分野を持つ大学院として、地元の高い期待を集めている。また、考古学や文化人類学、朝鮮言語文化やロシア言語文化などの希少分野を有しており、これらの分野の教育・研究の維持・発展は、本研究科の責務である。

## 4. 就職先からの期待

教育・医療関連機関等の知的専門技能を要する分野においては、専門職として高度な専門性と幅広い学識・教養を身につけた人材の育成が求められている。地域・企業等からは、問題発見解決能力を備えた人材、幅広い教養に基づいた企画・調査・分析能力を有する人材、地域社会の発展に積極的に関わりうる人材、あるいは国際的な場で現代社会の問題の解決に指導的な役割を果たす人材の育成が期待されている。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

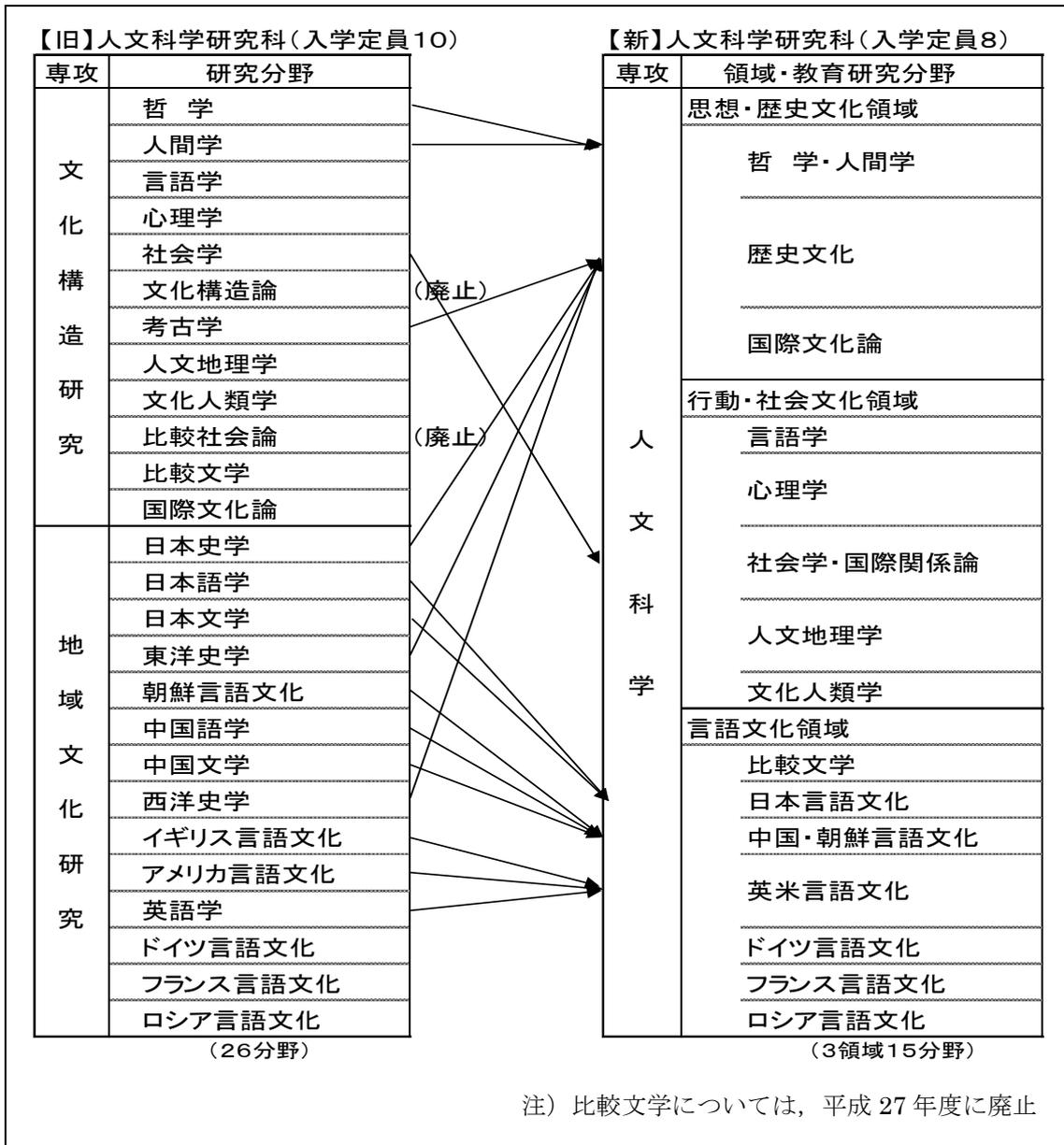
観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

●教育組織体制の工夫

本研究科は、現代社会の諸要請にさらに対応するため、平成 23 年に改組を行った。改組前の 2 専攻体制では教員相互の専攻を超えた連携が取りにくく、学生の教育・研究の要請にも十分に 대응することができなかつたため、1 専攻 3 領域に改組し、研究指導上の柔軟な連携体制を可視化した結果、学際的な学びのもと高い教養と専門性を身につけた職業人・市民を育成できる体制となっている(資料 1-1-1, 資料 1-1-2)。

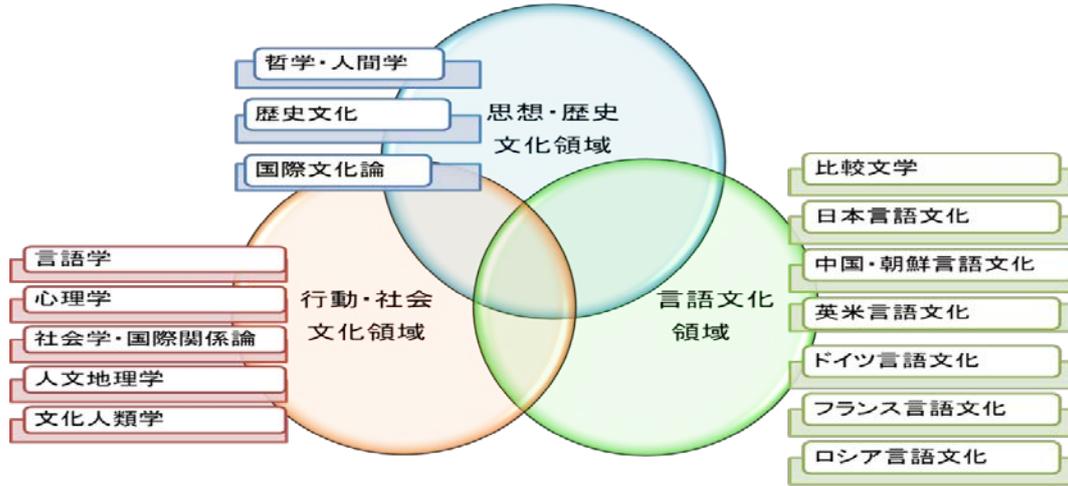
資料 1-1-1 人文科学研究科教育組織図 改組前・改組後



(出典：人文科学研究科小委員会にて作成)

資料 1-1-2 人文科学研究科教育組織図

思想・歴史文化領域は、文献や資料を研究の素材とする教育研究分野群，行動・社会文化領域は、実験や調査を研究手法とする教育研究分野群，言語文化領域は、言語や広義の文学を研究対象とする教育研究分野群である。領域を越えて、また必要に応じて他研究科の授業も受講でき学際的な学びが可能である。



(出典：富山大学大学院人文科学研究科規則に基づき作成)

●教育研究指導体制

複数指導体制（他領域や他研究科の教員を含む）をとることで、専門深化だけでなく、学際的な学びにも対応している（資料 1-1-3）。

資料 1-1-3 指導教員

- 1) 指導教員(正)・・・所属する研究教育分野の教員の中から一人を選ぶ。
  - 2) 指導教員(副)・・・一人もしくは二人を選ぶ。一人目の指導教員は同一領域の中から、また二人目は研究科担当のすべての教員または他研究科の教員の中から選ぶ。
- 他研究科の授業科目  
指導教員の許可を得て 8 単位を上限として履修できる。

(出典：人文科学研究科履修の手引き)

●学位取得に必要なプロセスの明示

学位取得に必要なプロセスについては、「人文科学研究科の学位論文審査および最終試験実施要項」に示すとともに、代表的な教育研究分野の履修モデル中に明示してある（資料 1-1-4， 1-1-5）。

資料 1-1-4 人文科学研究科の学位論文審査および最終試験実施要項（抜粋）

第二 学位論文題目は、原則として、修了予定年度の 4 月末日（9 月修了予定者の場合は、前年度の 10 月末日）までに、所定の用紙により人文学部総務課（教務担当）を経てそれぞれの所属する教育研究分野の指導教員に届け出るものとする。

なお、提出された学位論文題目は、当該修了予定年度に学位論文を提出しない場合においても、最終的に提出するまで有効な届けと見なすものとする。

(学位論文の提出)

第三 学位論文の審査を受けようとする者は、学位論文に学位申請書（様式 1），学位論文要旨（様式 2）を添え指導教員の承認を得て研究科長に提出するものとする。

2 学位論文は、修了予定年度の 1 月 10 日（当日が土曜日に当たるときはその翌々日，休日に当たるときはその翌日）16 時まで提出するものとする。

ただし、9月修了予定者は、7月10日（当日が土曜日に当たるときはその翌々日、休日に当たるときはその翌日）16時までに提出するものとする。

（審査委員の選出）

第四 学位論文を提出した学生の指導教員（正）は、主査1人、副査2人の学位論文審査委員候補者（様式3）を研究科長に推薦するものとする。

2 研究科長は、前項の審査委員候補者について、研究科委員会の議を経て審査委員と定める。

（学位論文の審査及び最終試験）

第五 研究科長は、学位論文の審査及び最終試験を審査委員に委嘱するものとする。

2 審査委員の主査は、審査の結果を学位論文審査及び最終試験報告書（様式4）により2月末日（9月修了予定の場合は8月末日）までに研究科長に提出するものとする。

3 前項の様式4の評価は、優・良・可・不可で表示する。ただし、指導要録の判定は、合格又は不合格で表示する。

（可否の判定）

第六 可否は、学位論文審査及び最終試験報告書に基づき研究科委員会で審議認定する。

（学位論文の保管）

第七 審査に合格した学位論文は、人文科学研究科で保管するものとする。

（出典：人文科学研究科の学位論文審査および最終試験実施要項）

資料1-1-5 履修モデルの明示（社会学・国際関係論分野（社会学））

学年	学期	研究指導プログラム		履修授業科目	修得すべき技能	
1 年 次	前期	研究手法の確立に向けた指導	4月	正指導教員と第1副指導教員の決定 正・副指導教員による履修指導	社会学特論(1)：社会調査法講義 都市経済学特殊研究（経済学研究科） 地域社会学特殊研究（経済学研究科） 社会学特論演習(1)：質的調査文献講読 課題研究 I：量的調査文献講読・研究テーマの決定  (計) 10 単位	社会調査の概要を理解し、様々な調査研究を学ぶ。その作業を通して、自らの研究テーマを絞り込んでいく。
	9月		課題研究 I の成果発表会			
	後期	研究計画の作成に対する助言・指導 必要な場合には第2副指導教員の決定	10月	研究計画の作成に対する助言・指導 必要な場合には第2副指導教員の決定	社会学特論(2)：社会理論 消費者行動論特殊研究（経済学研究科） 人文地理学特論(2)：地域社会と人文地理学 社会学特論演習(2)：質的調査プランニング 課題研究 II：学位論文プランニング  (計) 10 単位	調査の背景となる社会理論を学び習得する。並行して、自らの調査のプランニングを行う。
	3月		課題研究 II の成果発表会（研究計画の修正）			
2 年 次	前期	学位論文作成に向けた指導	4月	学位論文の概要の提出	人文地理学特論(1)：GIS＝地理情報システム 社会学特論演習(3)：質的調査実習 課題研究 III：学位論文のための調査の実施  (計) 6 単位	指導教員の指導のもとで調査を実施し、データ収集の方法やデータの整理・分析の技法を修得する。
	9月		課題研究 III の成果発表会（学位論文の中間発表会）			
	後期	学位論文の構成に関する指導・助言	10月	学位論文の構成に関する指導・助言	社会学特論演習(4)：質的調査レポート作成 課題研究 IV：学位論文執筆指導  (計) 4 単位	質的調査の技法と、データの分析によって、社会学上の課題を解決し、論理的に説明し、データをレポートにまとめる能力を身につける。
	1月		学位論文の提出			
	2月		学位論文の最終発表会および審査	総計 30 単位		

（出典：人文科学研究科履修の手引き）

●教員組織編成

【改組前】教授 38 人，准教授 25 人，講師 1 人，合計 64 人がおり，研究科で多彩な教育を実施するために必要な専任教員は確保されていたが，「文化構造研究」と「地域文化研究」の教員数にやや偏りがみられ，それを解消するためにも改組の必要があった（資料 1-1-6）。

資料 1-1-6 人文科学研究科教員配置状況（改組前）

人文科学研究科 専任教員一覧(平成22年5月1日)						
専攻	研究分野	教授	准教授	講師	人数計	(兼任)
		人数	人数	人数		
文化 構造 研究 専攻	哲学	2			2	
	人間学	2	1		3	
	言語学	2	1		3	1
	心理学	1	2		3	
	社会学	1	1		2	
	文化構造論	1			1	
	考古学	1	1		2	
	人文地理学		1		1	
	文化人類学		1		1	
	比較社会論	1	1		2	
	比較文学	1			1	
	国際文化論	4	3		7	
	【専攻・計】	16	12	0	28	
地域 文化 研究 専攻	日本史学	1	1		2	1
	日本語学	1	1		2	
	日本文学	2	1		3	1
	東洋史学	2	1		3	
	朝鮮言語文化		1	1	2	
	中国語学	1			1	
	中国文学	1	2		3	
	西洋史学		1		1	
	イギリス言語文化	2	1		3	
	アメリカ言語文化	4			4	
	英語学	2			2	
	ドイツ言語文化	4	2		6	
	フランス言語文化	1	1		2	
ロシア言語文化	1	1		2		
【専攻・計】	22	13	1	36		
研究科 計	38	25	1	64	3	

(出典：人文学部総務課にて調査)

【改組後】1 専攻 3 領域という緩やかな括りの中に全教員が所属する体制となった。平成 27 年 5 月 1 日現在で，教授 35 人，准教授 27 人，合計 62 人がおり，研究科で多様な教育を実施するために必要な専任教員が確保されており，徹底した少人数教育，多彩な言語教育が可能となっている（資料 1-1-7，1-1-8，1-1-9）。教員の採用は全て公募で行っており，この 6 年間に行った採用人事 10 件中，9 件で 30 代の若手教員を採用し，また，女性教員の比率も平均約 28%と高い水準を維持している（資料 1-1-10）。

# 富山大学人文科学研究科 分析項目 I

資料 1-1-7 人文科学研究科年度別教員配置状況 (改組後)

領域	教育研究分野	H23.5.1					H24.5.1					H25.5.1				H26.5.1			H27.5.1		
		教授	准教授	講師	人数計	(兼担)	教授	准教授	講師	人数計	(兼担)	教授	准教授	人数計	(兼担)	教授	准教授	人数計	教授	准教授	人数計
歴史 文化 思想 文・	哲学・人間学	3	1		4	1	3	2		5	1	2	3	5	1	2	3	5	2	3	5
	歴史文化	4	4		8		4	4		8		4	3	7		4	4	8	5	3	8
	国際文化論	4	3		7		4	3		7		4	3	7		4	3	7	5	3	8
	領域計	11	8		19	1	11	9		20	1	10	9	19	1	10	10	20	12	9	21
行動 化 領域 ・ 社会 文	言語学	4	1		5		4	1		5		4	1	5		4	1	5	3	1	4
	心理学		2		2		1	1		2		1	2	3		1	2	3	1	2	3
	社会学・ 国際関係論	2	2		4		2	2		4		2	2	4		2	2	4	2	2	4
	人文地理学		2		2			2		2			2	2			2	2		2	2
	文化人類学		2		2			2		2			2	2			2	2		2	2
	領域計	6	9		15		7	8		15		7	9	16		7	9	16	6	9	15
言語 文化 領域	比較文学	1			1		1			1		1		1		1		1	-	-	-
	日本語文化	2	2		4	1	3	1		4	1	5		5		6		6	4	1	5
	朝鮮言語文化・ 中国言語文化	2	3	1	6		2	3	1	6		2	4	6	朝鮮 中国		2	2		2	2
	英米言語文化	7	1		8		7	1		8		7	2	9		8	1	9	6	2	8
	ドイツ言語文化	1	2		3		1	2		3		1	2	3		1	2	3	1	2	3
	フランス言語文化	1	1		2		1	1		2		2		2		2		2	2		2
	ロシア言語文化	1	1		2		1	1		2		1	1	2		1	1	2	1	1	2
		領域計	15	10	1	26	1	16	9	1	26	1	19	9	28		22	7	29	17	9
	合計	32	27	1	60	2	34	26	1	61	2	36	27	63	1	39	26	65	35	27	62

(出典：人文学部総務課にて調査)

資料 1-1-8 少人数教育の実施状況

<p>本研究科では、専門的知識に関する深くかつ効果的な学習をうながすために、対話型の少人数教育を実施している。平成 22 年度から平成 27 年度までの開講授業あたりの受講者数は、平均すると 1.28 人である。</p> <p><b>【授業当たりの受講者】</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>年 度</th> <th>開講授業数</th> <th>受講者数</th> <th>授業あたりの受講者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平成 22 年度</td> <td>103</td> <td>170</td> <td>1.65</td> </tr> <tr> <td>平成 23 年度</td> <td>109</td> <td>145</td> <td>1.33</td> </tr> <tr> <td>平成 24 年度</td> <td>108</td> <td>122</td> <td>1.13</td> </tr> <tr> <td>平成 25 年度</td> <td>97</td> <td>119</td> <td>1.23</td> </tr> <tr> <td>平成 26 年度</td> <td>94</td> <td>105</td> <td>1.12</td> </tr> <tr> <td>平成 27 年度</td> <td>88</td> <td>106</td> <td>1.20</td> </tr> </tbody> </table>	年 度	開講授業数	受講者数	授業あたりの受講者数	平成 22 年度	103	170	1.65	平成 23 年度	109	145	1.33	平成 24 年度	108	122	1.13	平成 25 年度	97	119	1.23	平成 26 年度	94	105	1.12	平成 27 年度	88	106	1.20
年 度	開講授業数	受講者数	授業あたりの受講者数																									
平成 22 年度	103	170	1.65																									
平成 23 年度	109	145	1.33																									
平成 24 年度	108	122	1.13																									
平成 25 年度	97	119	1.23																									
平成 26 年度	94	105	1.12																									
平成 27 年度	88	106	1.20																									

(出典：人文学部総務課にて調査)

資料 1-1-9 多様な言語教育 (言語関連科目担当教員数)

言 語	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
中国語	6	6	6	6	6	6
朝鮮語	4	4	4	4	4	4
英語	10	9	9	10	10	9
ドイツ語	6	3	3	3	3	3
フランス語	2	2	3	4	4	4
ロシア語	4	4	4	4	4	4

この他、修了要件単位にはならないが、学部で実施しているネイティブスピーカーによる中国語・英語・ドイツ語・ロシア語 (専任)、朝鮮語・フランス語 (非常勤) の授業を受講することができる。

(出典：人文学部総務課にて調査)

資料1-1-10 女性教員比率

事項	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
女性教員	19人	18人	18人	18人	18人	16人
総員	64人	60人	61人	63人	65人	62人
女性比率	29.7%	30.0%	29.5%	28.6%	27.7%	25.8%

(出典：人文学部総務課にて調査)

●他大学・他研究科・他領域との連携体制

富山大学人文学部と金沢大学人間社会学域人文学類及び国際学類は、単位互換に関する協定を締結しており、研究科の学生も特別聴講学生として単位を取得することができる。

他研究科・他領域に関しては、履修モデルに、履修科目として例示するなど連携を図っている(資料1-1-11, 1-1-12)。

資料1-1-11 履修モデルに示した他研究科との連携例

教育研究分野	学年	学期	他研究科	履修授業科目
心理学	1年	後期	人間発達科学研究科	カウンセリング特論演習
	2年	前期	人間発達科学研究科	発達臨床心理学特論
社会学・国際関係論(社会学)	1年	前期	経済学研究科	都市経済学特殊研究
				地域社会学特殊研究
		後期		消費者行動論特殊研究

(出典：人文科学研究科履修の手引き)

資料1-1-12 履修モデルに示した他領域との連携例

教育研究分野	学年	学期	他領域	履修授業科目
<b>【思想・歴史文化領域】</b>				
歴史文化(考古学)	1年	後期	行動・社会文化	人文地理学特論(2)
国際文化論	1年	前期	行動・社会文化	国際関係特論(1)
			言語文化	中国文学特論(1)
		後期	行動・社会文化	国際関係特論(2)
			言語文化	中国文学特論演習(2)
<b>【言語文化領域】</b>				
ロシア言語文化	1年	前期	思想・歴史文化	国際文化特論(1)
			思想・歴史文化	人間学特論(1)
		後期	思想・歴史文化	国際文化特論(2)
			行動・社会文化	国際関係特論(2)
	2年	前期	思想・歴史文化	国際文化特論演習(3)

(出典：人文科学研究科履修の手引き)

●大学の国際化の体制整備

主としてロシアを含む東アジア諸地域の大学と学術交流協定を締結して交流事業を行っている。また平成23年度に本研究科独自の奨学金制度を作ることで、さらなる留学の促進を図っている(資料1-1-13, 1-1-14, 1-1-15)。

資料1-1-13 交流協定締結先一覧(部局間交流協定)

国名	大学等名	協定締結年月日(すべて第2期期間中)
ロシア	ノヴォシビルスク大学	2001/10/30(2011/10/14再締結)
ロシア	モスクワ言語大学	2013/03/22
韓国	慶北大学校人文大学	2010/07/30
中国	佳木斯大学	2014/06/19

## 富山大学人文科学研究科 分析項目 I

ベトナム	ハノイ国家大学外国語大学	2015/12/22
中国	遼寧大学	2016/3/18(指定校推薦)

(出典：人文学部総務課にて調査)

### 資料1-1-14 人文科学研究科に係わる大学間交流協定

国名	大学等名	協定締結年月日
韓国	国民大学校	2005/03/07
中国	遼寧大学	1984/05/09
中国	大連理工大学	1999/11/11 (2004/10/18再締結)
中国	山東大学	2002/04/01
中国	上海大学	2002/06/28 (2012/11/02再締結)
台湾	国立政治大学	2014/04/14
エジプト	アシュート大学	2003/02/02 (2008/07/19再締結)
アメリカ合衆国	マーレイ州立大学	2005/09/20
アメリカ合衆国	ハワイ大学マウイカレッジ	2014/05/27
フランス	オルレアン大学	2015/03/04

網掛けは第2期期間中に締結及び再締結

(出典：人文学部総務課にて調査)

### 資料1-1-15 人文学部・人文科学研究科独自の国際交流のための奨学金制度

(趣旨)	
1 この要項は、富山大学人文学部に配分された国立大学法人富山大学五福キャンパス国際交流活性化推進事業資金の運用に関し、必要な事項を定める。	
(事業内容)	
2 事業は次のとおり外国へ留学する学生及び外国人留学生への奨学事業とする。	
事業名	対象留学期間
海外留学への奨学事業	3ヶ月以上12ヶ月以内
短期渡航への奨学事業	3ヶ月未満
外国人留学生への奨学事業	12ヶ月以内
外国人留学生への生活支援(家賃補助)奨学事業	12ヶ月以内
その他特に必要と認めた事業	—————
(事業の実施)	
3 事業の実施にあたっては、人文学部国際交流委員会(以下、「学部国際交流委員会」という。)において次の事項を審議し、人文学部教授会の承認を得るものとする。 なお、人文科学研究科の学生に係る採択に関しては、人文科学研究科委員会の承認を得るものとする。	
(1) 事業の実施計画及び予算に関する事項	
(2) 実施事業の募集及び採択に関する事項	
(3) その他事業の実施に関し必要な事項	
(給付条件)	
4 給付の条件は、次のとおりとする。	
(1) 給付の条件	
事業名	条件
海外留学への奨学事業 短期渡航への奨学事業	①人文学部または人文科学研究科に在籍する学生であること。 ②学業成績が優秀であること。 ③受入れ先大学等で授業を履修することを原則とする。なお、人文科学研究科に在籍する学生は、研究目的で海外に渡航する場合、この限りでない。 ④申請した留学・渡航について別に総額5万円以上の奨学金の支給を受けていないこと。
外国人留学生への奨学事業	①本学の学術交流協定に基づき人文学部または人文科学研究科において10月受入れ予定の外国人留学生。 ②申請した留学について別に月額5万円以上の奨学金の支給を受けていないこと。

## 富山大学人文科学研究科 分析項目 I

外国人留学生への生活支援（家賃補助）奨学事業	①本学の学術交流協定に基づき人文学部または人文科学研究科に受け入れる、外国人留学生または日本語・日本文化研修留学生。 ②留学期間中、自ら居住するために、アパート等の賃貸住宅を借り受け（申請者本人がアパートの賃貸契約者であること）、月額2万円以上の家賃（共益費等を除く）を支払う学生。
------------------------	--

(2)すでに留学している者が、海外留学への奨学事業に係る給付の決定を受けた場合は、留学開始日に遡って全額を支給する。

(給付額・給付方法等)

5 給付額及び給付方法については、次のとおりとする。

(1) 給付額，給付方法

事業名	給付額	給付方法
海外留学への奨学事業	月額2万円	渡航前に全額支給 (すでに留学中の場合、この限りでない。)
短期渡航への奨学事業	2万円	原則として渡航前に支給
外国人留学生への奨学事業	月額4万円	毎月
外国人留学生への生活支援（家賃補助）奨学事業	月額5千円	毎月

\*家賃補助については平成26年度より実施。

(出典：富山大学人文学部における富山大学五福キャンパス国際交流活性化  
推進事業資金取扱要項(抜粋))

### ●入学者選抜方法の工夫と検討状況

近年多くの人文系研究科が定員確保に苦慮しているが、本研究科でも平成25年度入試まではほぼ定員を充足できたものの、平成26,27年度入試で定員割れが生じたことから、平成27年度に大学院進学説明会を年2回開催し、高等専門学校にも説明に出向くなど志願者確保に努めた結果、平成28年度入試では定員を確保している(資料1-1-16, 1-1-17)。

こうした動向を受け入試方法等の再検討を行い、平成29年度入試から、前期・後期日程に分けて行うことを決定した(資料1-1-18)。また留学生の確保に向けた施策としては、「外国人留学生特別入試制度」や、「指定校推薦制度」(遼寧大学締結、山東大学交渉中)を整備し、優秀な学生の着実な受入を図る。社会人に対しては、既に、志願者の実情を考慮し、入学後の個別指導を前提に外国語科目を免除して、専門科目と口述試験のみとしている。

資料1-1-16 人文科学研究科入学志願状況等一覧

年度	専攻	一般入試					一般入試(2次)					社会人入試					社会人入試(2次)					合計					入学者数
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続者数	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続者数	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続者数	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続者数	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続者数	
H28	人文科学専攻	8	5 (2)	5 (2)	5 (2)	4 (2)	若干名	4 (2)	4 (2)	3 (2)	3 (2)	若干名	0	0	0	0	若干名	2	2	2	2	8	11 (4)	11 (4)	10 (4)	9 (4)	9 (4)
H27	人文科学専攻	8	6 (3)	5 (3)	4 (3)	4 (3)	若干名	1 (1)	1 (1)	0	0	若干名	0	0	0	0	若干名	2	2	2	2	8	9 (4)	8 (4)	6 (3)	6 (3)	6 (3)
H26	人文科学専攻	8	9 (3)	9 (3)	4 (1)	4 (1)	若干名	2	2	1	1	若干名	2	2	2	2	若干名	0	0	0	0	8	13 (3)	13 (3)	7 (1)	7 (1)	6 (1)
H25	人文科学専攻	8	10 (4)	10 (4)	8 (4)	8 (4)	/					若干名	1	0	0	0	/					8	11 (4)	10 (4)	8 (4)	8 (4)	8 (4)
H24	人文科学専攻	8	6 (2)	6 (2)	4 (1)	3 (1)	若干名	2 (2)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	若干名	3	3	3	3	若干名	0	0	0	0	8	11 (4)	10 (3)	8 (2)	7 (2)	7 (2)
H23	人文科学専攻	8	13 (6)	12 (6)	5	5	2	5 (3)	5 (3)	3 (2)	3 (2)	若干名	1	1	1	0	/					8	19 (9)	18 (9)	9 (2)	8 (2)	8 (2)
H22	文化構造研究	5	5 (1)	5 (1)	5 (1)	5 (1)	/					若干名	0	0	0	0	/					5	5 (1)	5 (1)	5 (1)	5 (1)	5 (1)
	地域文化研究	5	6 (1)	6 (1)	6 (1)	6 (1)	/					若干名	1	1	0	0	/					5	7 (1)	7 (1)	6 (1)	6 (1)	6 (1)
	計	10	11 (1)	11 (1)	11 (1)	11 (1)	/					若干名	1	1	0	0	/					10	12 (1)	12 (1)	11 (1)	11 (1)	11 (1)

(注) ( )内は外国人で内数

(出典：人文学部総務課にて調査)

資料 1-1-17 人文科学研究科進学説明会案内

別添

資料 1-1-18 平成 29 年度人文科学研究科入学者選抜の概要【予告】

[募集人員]		
募集人員	前期日程	後期日程
8 名	一般入試	一般入試
	社会人入試	社会人入試
	外国人留学生特別入試	外国人留学生特別入試
	外国人留学生指定校推薦	
※ 前期日程及び後期日程の各募集人員は、学生募集要項で公表します。 ※ 外国人留学生特別入試について、外国語の日本語を受験する際は、日本語能力試験 N1 の成績で代替することができます。		

(出典：平成 29 年度人文科学研究科入学者選抜の概要【予告】(抜粋))

●留学生の受入体制

専任の留学生担当教員が中心となって、研究留学生や学術交流協定校からの特別研究生などの受入に際し、手厚い支援を実施している。また、平成 23 年度から、留学生の日本語論文作成能力の向上を図るため、経済学研究科と連携して学長裁量経費により、アカデミック・ライティングの指導を実施しており（平成 27 年度は研究科経費で実施）、留学生のみならず指導教員からも有益であると認められている（資料 1-1-19, 1-1-20）。

資料 1-1-19 アカデミック・ライティング実施状況

実施期間	実施回数	指導留学生数 (のべ)	総時間
平成 23 年度後期	17 回	25 人	66 時間
平成 24 年度前期	6 回	12 人	24 時間
平成 24 年度後期	19 回	24 人	62 時間
平成 25 年度前期	15 回	23 人	60 時間
平成 25 年度後期	14 回	24 人	56 時間
平成 26 年度前期	12 回	15 人	48 時間
平成 26 年度後期	16 回	20 人	62 時間
平成 27 年度前期	12 回	36 人	36 時間
平成 27 年度後期	15 回	52 人	52 時間

(出典：人文学部総務課にて調査)

資料 1-1-20 アカデミック・ライティングの実施に係る報告書

別添

●社会人学生の受入体制

本研究科では、社会に開かれた大学院を目指し、社会人に配慮した指導体制をとっている。社会人学生の職業や社会生活に柔軟に対応するために従来の昼夜開講制に加えて、平成 24 年度から長期履修制度を導入している（資料 1-1-21, 1-1-22, 1-2-8）。

資料 1-1-21 昼夜開講制度

11. 大学院設置基準第 14 条に定める教育方法の特例について

大学院設置基準第 14 条では、「教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は期間において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる」旨規定されています。

これを踏まえ、人文科学研究科においては、社会人（有職者）の合格者に対して、所属先の勤務条件等を考慮し時間割については、昼夜開講やその他の時間帯・時期等可能な範囲で相談に応じます。

（出典：大学院人文科学研究科学生募集要項（抜粋））

資料 1-1-22 長期履修制度（平成 24 年度～）

富山大学大学院人文科学研究科長期履修学生の取扱いについて

平成 24 年 3 月 14 日 研究科委員会

1. 趣旨

この取扱いは国立大学法人富山大学大学院学則（以下「大学院学則」という。）第 25 条に基づき、長期にわたり計画的に課程を履修する学生（以下「長期履修学生」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

2. 資格

長期履修学生として認定をすることができる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

- (1) 職業を有し就業しているため標準修業年限で修了することが困難であると予め想定できる者
- (2) 学生自身の疾病等のため又は育児、介護等家族の経常的な看護のため、終日授業に出席することが困難であると予め想定できる者
- (3) その他、相当の事由があり、人文科学研究科委員会（以下「研究科委員会」という。）が認定した者

3. 長期履修の期間

長期履修学生として、標準修業年限を超えて履修できる期間は 2 年までとし、1 年単位とする。

（出典：大学院人文科学研究科長期履修学生の取扱いについて（抜粋））

●教員の教育力向上のための体制

教員の教育力の向上のため、学部と共通で FD 委員会を設置している（資料 1-1-23）。多様な問題を抱えている学生に対応するために、年に数回 FD 研修会を実施し学生指導に活かしている（資料 1-1-24）。また平成 27 年度は、FD 研修会「人文科学研究科の現状と課題」を開催し、修了生アンケートの分析結果（資料 2-1-8-②）や教員の事例報告をもとに課題を共有し、カリキュラム等の見直しを検討していくことになった。

資料 1-1-23 人文学部・人文科学研究科 FD 委員会内規（抜粋）

（設置）

第 1 条 富山大学人文学部及び人文科学研究科に、FD 委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（審議事項）

第 2 条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) 教育内容の改善に関する事。
- (2) 教育方法の改善に関する事。
- (3) 教育に関する研修会・講演会の開催に関する事。
- (4) その他、教育の改善に関する事。

（組織）

第 3 条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 講座から選出された教員 各 1 人
- (2) 人文科学研究科小委員会の委員 2 人
- (3) 学部長が指名した教員

（出典：人文学部・人文科学研究科 FD 委員会内規（抜粋））

資料 1-1-24 学部と連動して開催された大学院関連 FD 研修会一覧

名 称	開 催 日 時	開 催 場 所
学生の自殺予防説明会	平成22年5月12日	人文学部大会議室
自殺予防対策FD研修会	平成25年9月11日	人文学部大会議室
発達障害（傾向のある）学生の理解と対応についての説明会	平成26年11月12日	人文学部大会議室
不登校学生に関する現状と課題	平成27年6月10日	人文学部大会議室

(出典：人文学部総務課にて調査)

●教育情報の発信

平成 27 年度版の学部案内に大学院専用のページを新たに設け、研究科の構成や目標・特色を明示し、『人文科学研究科論集』や「院生研究成果報告会」等の研究成果発表の場について紹介している（資料 1-1-25）。

資料 1-1-25 人文科学研究科案内

別添
----

人文科学研究科の HP に、入学者受入方針，教育課程編成方針，学位授与方針を明示し，3つの領域に分けて各教育研究分野の説明と所属教員の研究内容を一覧として示し，進路選択の一助とした。また，留学生に対応するため英語及び中国語版のページも作成した（資料 1-1-26）。

資料 1-1-26 人文学部・人文科学研究科 HP の人文科学研究科のページ

富山大学 人文学部 大学院 人文科学研究科

English 中文

サイト内検索

富山大学HP | リンク集 | サイトマップ | お問い合わせ |

HOME 概要 入試 教育 就職・進学 地域貢献 研究

大学院

大学院

大学院構成

思想・歴史文化領域

行動・社会文化領域

言語文化領域

【哲学・人間学】

哲学は、存在・認識・世界観などの諸問題を、主に西洋哲学の方法論にもとづいて歴史的な文脈を踏まえながら、深く掘り下げて研究します。人間学の研究領域には西洋思想だけでなく日本・東洋思想も含まれ、過去から現在に至る倫理思想、宗教思想、社会思想に、さらに生命倫理やジェンダーなどの現代的課題にも取り組みます。

氏名	専門分野	研究内容
教授 永井 龍男	哲学	アリストテレスを中心とした古代ギリシア哲学
准教授 池田 真治	哲学	ライブニッツを中心とした近現代西洋哲学
教授 松崎 一平	中世哲学史	古代末期・中世の西欧キリスト教思想
准教授 田畑 真美	倫理想史	日本倫理想史、古代から近世の神道・仏教・儒学
准教授 澤田 哲生	現代哲学	メルロ・ポンティを中心とした現象学的人間学

(出典：人文学部・人文科学研究科ホームページ)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

以下の点で想定する関係者の期待に十分応える体制となっている。

- ① 平成 23 年度に改組を行い, 教員の配置やカリキュラムに柔軟性をもたせたことによって, 更なる学際的な学びが可能となっている。
- ② 国際化の面では, 海外の交流協定校を 5 校増やして, 日本人学生の派遣・留学生の受入の幅を広げ, 平成 23 年度には本研究科独自の奨学金を創設し, 留学を経済面で支援する体制を整えている。
- ③ 留学生に対しては, 専任の留学生担当教員を配置し, きめ細かな支援を行うとともに, アカデミック・ライティングの指導を実施し, 日本語による論文作成を支援している。
- ④ 平成 29 年度入試から, 前・後期に分けて入試を行い, 留学生に対して「外国人留学生特別入試制度」や「指定校推薦制度」の導入を決定した。
- ⑤ 社会人学生の個々の事情に対応するため, 昼夜開講制や第 2 期からは新たに長期履修制度を導入し柔軟な開講形態をとっている。
- ⑥ 平成 27 年度に, FD 研修会「人文科学研究科の現状と課題」を開催し, それを受けてカリキュラムの見直しに入った。
- ⑦ HP の充実に加えて, 平成 27 年度版の学部案内に大学院専用のページを新たに設け, 大学院の概要を発信した他, 進学説明会を実施している。

**観点 教育内容・方法**

(観点に係る状況)

本研究科では、富山大学全体の教育方針を踏まえつつ、人文科学研究科として3つの方針を策定し、HP や募集要項、履修の手引き等に掲載し明示している。また、学位授与方針については、新入生オリエンテーションでも学生に周知している(資料1-2-1, 1-2-2, 1-2-3)。

## 資料1-2-1 入学者受入方針

人文科学研究科は、以下の能力や資質を持った学生を求めます。

- ・専攻する研究分野についての基礎的な研究能力を身につけている。
- ・論理的思考力と創造性をもち、研究に対する強い意欲を備えている。
- ・深い人間理解と倫理観を備え、社会貢献に必要な豊かな人間性を有している。

(出典：富山大学大学院人文科学研究科入学者受入方針)

## 資料1-2-2 教育課程編成方針

人文科学研究科の学位授与方針を受けて、次のような方針で教育課程を編成しています。

- ・1年次には、「特論」で各専門分野の基本概念や方法論などを踏まえて深く学びながら、「特論演習」で、研究文献・史料などの高度の読解力や人間や社会を対象とする実験や調査の手法、資料の分析方法などを修得していきます。これと並行して異なる研究分野の教員の指導を受けることによって、専門性を深化させるとともに、学際性・総合性を備えた学修が可能になります。
- ・「課題研究」で自ら研究課題を設けて、自主的・自立的に研究を遂行しうる能力を養成し、2年次には、修士論文を作成します。他領域や他研究科の教員の指導も受けられます。
- ・所定の単位を修得し、修士論文を提出します。厳正な審査を経て、学位が授与されます。

(出典：富山大学大学院人文科学研究科教育課程編成方針)

## 資料1-2-3 学位授与方針

人文科学研究科が目標とする人物像は、以下の通りです。

- ・人文科学諸分野に関する高度な専門的知識を有し、その知識を背景に地域や時代をとらえ、地域や時代の先端的要請に多面的に応えうる人材。
- ・主に欧米や東アジアの、思想、歴史、文学、言語に精通し、当該地域に関する研究を発展させ、その成果を世界に展開させていける人材。
- ・自らの研究を独創的に発展させ、人間に関わる諸課題に対して創造的に対応できる人材。
- ・広く人文科学諸分野に精通し、知識基盤社会を支えることができる人材。

以上のような人材を育成するために、カリキュラムを編成・実施しています。修士課程の教育を通じて、学生は以下の能力を身につけます。

- ・思想、歴史、文化、心理、社会、言語、文学に関する豊かな知見。
- ・人文科学諸分野に関する調査・発表・討論などの実践的能力。
- ・様々な現代的課題を研究し、解決する能力。
- ・日本文化はもとより、欧米や東アジアなどの異文化を理解する能力。
- ・コミュニケーションを通して豊かな人間関係を築きながら、多文化共生社会のなかで協調・協働して目標を実現することができる能力。

(出典：富山大学大学院人文科学研究科学位授与方針)

## ●カリキュラムの体系性

学位取得に向けたプロセスが、研究指導プログラムとして示され、他研究科や他領域等の授業も推奨されている。また各期に修得すべき技能も明示されているなど具体性に富む履修モデルを提示している(資料1-1-5)。

●学際的教育

専門とする教育研究分野以外の授業も積極的に受講している例が多くみられる。また、ネイティブスピーカーによる学部の会話の授業を受講したり、インターンシップに参加する者もいる（資料1-2-4）。

資料1-2-4 学際的な受講例

教育研究分野 [研究分野]		必修科目	選択科目	所属外科目
旧 課 程	中国文学	学位論文	日本文学特論(2)	東アジア言語文化特殊講義
		中国文学論演習	日本文学特論(2)	中国言語文化演習
		中国文学論演習	日本文学特論(3)	中国言語文化講読
		中国文学論演習	日本文学論演習	中国語コミュニケーション(会話)
			中国語学特論(1)	
			中国語学演習	
			中国語学演習	
			中国文学特論	
			中国文学特論	
新 課 程	言語学	学位論文	言語学特論(1)	
		課題研究 I	言語学特論(2)	
		課題研究 II	言語学特論演習(1)	
		課題研究 III	言語学特論演習(2)	
		課題研究 IV	言語学特論演習(3)	
			言語学特論演習(4)	
			日本語学特論(2)	
			日本語学特論演習(1)	
			日本語学特論演習(3)	
			朝鮮言語文化特論演習(2)	
		英語学特論演習(1)		
	日本言語文化 (日本語学)	学位論文	考古学特論(1)	インターンシップ II
		課題研究 I	考古学特論(2)	
		課題研究 II	日本語学特論(1)	
		課題研究 III	日本語学特論(2)	
		課題研究 IV	日本語学特論演習(1)	
			日本語学特論演習(2)	
			日本語学特論演習(3)	
			日本語学特論演習(4)	
			日本文学特論演習(3)	
		日本文学特論演習(4)		
	朝鮮言語文化特論(2)			

新課程・言語学分野の院生は、日本語学習者の話す日本語に現れる母語の特徴を考慮するために対照言語学の知識を必要としており、所属分野である言語学の科目のほか、対照すべき日本語学・朝鮮語学・英語学を履修している。  
 新課程・日本言語文化分野(日本語学)の院生は、日本語教育における朝鮮語話者への漢字指導について考察するため、朝鮮半島と古代の日本における漢字の受容と使用という専門的な事項をそれぞれ朝鮮言語文化特論と考古学特論で学ぶことができる。

(出典：人文科学研究科小委員会にて調査)

平成23年度入学生のカリキュラムより、他分野の履修が促進され、他分野での単位取得率が上昇している(資料1-2-5)。関連他分野での履修が広がることにより、大学院生の在籍していない分野の授業も活用されると共に、研究手法の多角化が進んでいる(資料1-2-6)。

他研究科の授業科目は、各自の研究テーマに応じて選択することができ、8単位まで修了要件単位に算入できる(資料1-2-7, 1-1-3)。

資料1-2-5 他教育研究分野の単位取得率

修了年度	旧カリキュラム (～平成22年度入学)	新カリキュラム (平成23年度入学～)
平成22年度修了	14/311 (5%)	
平成23年度修了	16/421 (4%)	
平成24年度修了	30/117 (26%)	50/275 (18%)
平成25年度修了	0/40 (0%)	32/94 (34%)
平成26年度修了		50/224 (22%)
計	60/889 (7%)	132/593 (22%)

(他分野専門科目履修による単位数/全取得単位数)

(出典：人文学部総務課にて調査)

資料1-2-6 他教育研究分野の履修状況の例

教育研究分野	旧カリキュラム (～平成22年度入学)	新カリキュラム (平成23年度入学～)
旧：日本語学 新：日本語文化	平成22年度修了生 日本語学関係科目 計28単位 人文地理学特論(2) 2単位	平成26年度修了生 日本語文化関係科目 計24単位 考古学特論(1)(2) 計4単位 朝鮮言語文化特論(2) 2単位
ロシア言語文化	平成24年度修了生 ロシア言語文化関係科目 計34単位	平成25年度修了生 ロシア言語文化関係科目 計24単位 国際文化特論(1)(2) 計4単位 国際文化特論演習(1)-(3) 計6単位
国際文化論	平成22年度修了生 国際文化論関係科目 計30単位	平成26年度修了生 国際文化論関係科目 計24単位 中国文学特論(1)(2) 計4単位 中国文学特論演習(1)-(4) 計8単位

(出典：人文学部総務課にて調査)

資料1-2-7 他研究科における単位取得

履修年度	授業科目	開講研究科	単位数	履修者数
平成21年度	障害児医療学特論	教育学研究科	2	1
平成21年度	日本文学演習	教育学研究科	2	1
平成23年度	美学特論演習Ⅱ	芸術文化学研究科	2	1
平成23年度	日本語表現文化特論	人間発達科学研究科	2	1
平成23年度	日本語表現文化特論演習	人間発達科学研究科	2	1
平成24年度	日本語表現文化特論	人間発達科学研究科	2	2
平成24年度	日本語表現文化特論演習	人間発達科学研究科	2	2
平成26年度	音楽家教育法	人間発達科学研究科	2	1
平成26年度	伝統文化特論演習	芸術文化学研究科	2	1
平成26年度	生涯学習特論	人間発達科学研究科	2	1
平成26年度	生涯発達特論	人間発達科学研究科	2	1
平成26年度	言語環境特論	人間発達科学研究科	2	1
平成27年度	伝統文化特論	芸術文化学研究科	2	1
平成27年度	日本・東洋美術史特論	芸術文化学研究科	2	1
平成27年度	日本・美術史特論演習	芸術文化学研究科	2	1

(出典：人文学部総務課にて調査)

●社会人向けの制度

多様な学生の教育に対する取り組みの一環として、社会人の入学者に対応するため、必要に応じて、長期履修の制度を活用している。また、夜間や休日の開講など、学生の勤務形態に応じて柔軟な日程調整を行っている（資料1-2-8）。

資料1-2-8 社会人向け制度の利用状況

履修形態	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
長期履修（入学年度別人数）			2			1
夜間開講（実施年度別人数）		1	1			
柔軟開講（実施年度別人数）			1	1	1	1

（出典：人文学部総務課にて調査）

●国際的な研究体験

本研究科では、学術交流協定校等に留学や調査・研究・日本語実習を目的として大学院生を派遣し、国際的な研究体験の機会を提供している（資料1-2-9）。これらの体験を通じ修了生の中には日本語担当教員となり、東アジアにおける日本語研究の要となる者もいる（資料1-2-10）。また、人文学部・人文科学研究科として予算措置を行い、東アジア関係を中心に、プリンストン大学の牧野成一教授をはじめ世界的に活躍する研究者を招聘して研究交流を実施し、学生が国際的な研究環境で研鑽を積む機会を提供している（資料1-2-11）。

資料1-2-9 大学院生の海外留学・研修状況

年度	教育研究分野	交流協定校	目的
平成22年度	国際文化論	中国 上海大学	留学のため
	中国文学	中国 大連理工大学	留学のため
	日本語学	韓国 慶北大学校	日本語実習のため
平成23年度	国際文化論	韓国 国民大学校	留学のため
	日本言語文化	中国 ハルビン師範大学	修士論文作成のため
平成24年度	日本言語文化	中国 佳木斯大学	日本語実習のため
	日本言語文化	中国 佳木斯大学	日本語実習のため
平成25年度	日本言語文化	中国 佳木斯大学	修士論文作成のため
平成26年度	日本言語文化	タイ 国立開発行政大学院大学	日本語実習のため

（出典：人文学部総務課にて調査）

資料1-2-10 海外における日本語教師の実績

期間	派遣先
平成19年～24年	韓国 釜慶大学校
平成22年～25年	中国 ハルビン師範大学
平成27年～	ベトナム ハノイ国家大学外国語大学

（出典：人文科学研究科小委員会にて調査）

## 富山大学人文科学研究科 分析項目Ⅰ

### 資料1-2-11 国際的に著名な研究者による講演等

開催日	講演者氏名	講演の形態
平成22年10月21日	長島要一(日本文学)・デンマークコペンハーゲン大学	国際シンポジウム「文学における国際交流－異文化理解の検証と普及－」での基調講演
平成23年6月4日	クック治子(日本語談話分析)・米国ハワイ大学マノア校	平成23年度日本語学・日本語教育学公開講演会
平成23年12月10日	陳弱水(東洋史学)・台湾大学	国際公開シンポジウム「近世中国の刑事政策と社会問題」での講評
	妹尾達彦(東洋史学)・中央大学	国際公開シンポジウム「近世中国の刑事政策と社会問題」での研究報告
	大澤正昭(東洋史学)・上智大学	
平成24年7月27日	ジョン・ホイットマン(言語学)・米国コーネル大学	NINJALセミナー「漢文訓読再発見」での講演
	朴鎮浩(韓国語学)・韓国ソウル大学校	NINJALセミナー「漢文訓読再発見」でのパネリスト
平成24年11月17日	華立(東洋史学)・大阪経済法科大学	共同シンポジウム「華人世界の拡大と天下意識」での基調講演
平成25年11月30日	華立(東洋史学)・大阪経済法科大学	シンポジウム「近世中国の刑法と司法制度」での基調講演
平成25年12月8日	ダニエル・ロング(社会言語学)・首都大学東京	国際シンポジウム「世界の中の日本語・世界の中の日本－親日の形成と言語－」での研究報告
	張守祥(日本語教育学)・中国佳木斯大学	
平成26年2月27日	ジャン・バザンテ(日本学)・仏国オルレアン大学	国際シンポジウム「フランスにおける日本学、日本におけるフランス学」での基調講演
平成26年7月5日	牧野成一(言語学)・米国プリンストン大学	国際シンポジウム「ことばは音楽とどう関わるのか」での基調講演
平成26年12月7日	ダニエル・ロング(社会言語学)・首都大学東京	シンポジウム「東南アジアにおける教育拠点の形成と人文的『知』の応用」での研究報告
平成26年12月20日	大野＝デコンブ・泰子(比較文学)・仏国オルレアン大学	国際シンポジウム「私たちはフランス文明から何を学んだか」での基調講演
平成27年5月6日	アラン・ケラ＝ヴィレジェ(西洋史)・仏国リセ・ヴィクトル・ユゴー	講演会「ビエール・ロチとラファディオ・ハーン」での講演
平成27年10月29日	ピアッジョ・ダンジェロ(比較文学)・伯国ブラジリア大学	講演会「泣く女を巡って－ボードレール、谷崎、そして芸術」での講演
平成27年11月7日	李相揆(韓国語学)・韓国 慶北大学	東アジア言語地理学国際シンポジウム(富山大会)での研究報告
	董忠司(中国語学)台湾 新竹教育大学	
	沈力(言語学)・同志社大学	
	鄭曉峯(言語学)・台湾 中央大学	
	李仲民(中国語学)・台湾 文化大学	
	岸江信介(社会言語学)・徳島大学	
	大西拓一郎(日本語学)・国立国語研究所	
	洪惟仁(言語学)・台湾 台中教育大学	
真田信治(社会言語学)・奈良大学		
平成27年11月28日	窪添慶文(東洋史)・お茶の水女子大学名誉教授	シンポジウム「分裂する中国－二つの南北朝－」での講評
平成27年12月19日	池田雅之(比較文学)・早稲田大学	講演会「小泉八雲と夏目漱石の「大きな旅」－祈りと再生の場を求めて」での講演
平成28年2月13日	オード・デュリエル(文学)・仏国オルレアン大学	国際シンポジウム「ラファディオ・ハーンとフランス」での基調講演
平成28年2月14日	ヒロ・ヒライ・蘭国・ラドバウド大学	国際シンポジウム「初期近代ヨーロッパの哲学とインテレクチュアル・ヒストリー」での基調講演
	リチャード・アーサー(哲学)・加国マクマスター大学	
平成28年2月14日	西原鈴子(日本語教育学)・国際交流基金日本語国際センター所長	国際シンポジウム「日本語・日本語教育研究のグローバルな担い手たち－帰国した留学生たちの今－」での講演
	モルチャノワ・リリア(日本語教育学) ロシア・元リャザン国立大学	国際シンポジウム「日本語・日本語教育研究のグローバルな担い手たち－帰国した留学生たちの今－」での研究報告
	コルクサ・アリ・アイジャン(日本語教育学) トルコ・ネヴァイシエヒル大学	

(出典：人文学部総務課にて調査)

### ●国際交流の促進・キャンパスの国際化

海外の大学との交流事業を促進した結果、留学生が多数来学し、授業内外や大学院生室等で留学生と交流する環境が整っている(資料1-2-12, 1-2-13)。

### 資料1-2-12 留学生(正規生)の受入れ状況

年度	人数	教育研究分野	出身校
平成22年度	1	言語学	富山大学人文学部
平成23年度	2	日本言語文化	ハルビン理工大学外国語学部
		中国・朝鮮言語文化	中南民族大学

## 富山大学人文科学研究科 分析項目 I

平成 24 年度	2	国際文化論	蘭州理工大学
		日本語文化	広東商学院大学
平成 25 年度	4	国際文化論	遼寧大学日本語学部
		日本語文化	遼寧对外経貿学院日本語学部
		日本語文化	金沢星陵大学経済学部一部
		中国・朝鮮言語文化	富山大学人文学部
平成 26 年度	1	日本語文化	大連外国語学院
平成 27 年度	3	哲学・人間学	富山大学人文学部
		日本語文化	佳木斯大学
		日本語文化	西安培華学院

(出典：人文学部総務課にて調査)

### 資料 1-2-13 研究留学生等の受入れ状況

種 別	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
研究生		1	1			
特別研究学生	1	2	1	2	3	1
特別聴講学生			1			1
学部研究生	3(3)	1(1)	2(2)	2(2)	2(1)	3(2)
学部研究生のうち、( )内は人文科学研究科へ正規生として進学した者の内数						

(出典：人文学部総務課にて調査)

### ●アクティブラーニングによるノンアカデミック能力養成

本研究科では、地域における課題を研究テーマとして取り上げる学生に、フィールドワークによる調査を積極的に奨励している。地元自治体と連携した地域行政や地域社会での聞き取り調査、地域社会内の行事への参与観察などの経験を通じて地元自治体にも寄与しており、研究職以外の分野でも活躍できるような多様な能力開発を実現している。(資料 1-2-14)。

### 資料 1-2-14 地元自治体等が行う事業への支援

実施年月	事業内容	人数
平成 23 年 9 月	中心市街地活性化事業への支援 (富山市)	1
平成 24 年 9 月	中心市街地活性化事業への支援 (富山市)	1
平成 25 年 6 月	地域文化活性化事業への支援 (富山商工会議所)	1
平成 25 年 9 月	ゼミ合宿誘致事業への支援 (富山市)	1
平成 25 年 11 月	空き家対策事業への支援 (砺波市)	2
平成 26 年 1 月	空き家対策事業への支援 (砺波市)	2
平成 26 年 7 月	ゼミ合宿誘致事業への支援 (砺波市)	3
平成 26 年 8 月	ゼミ合宿誘致事業への支援 (砺波市)	3
平成 26 年 9 月	ゼミ合宿誘致事業への支援 (砺波市)	3
平成 26 年 11 月	ゼミ合宿誘致事業への支援 (砺波市)	3
平成 26 年 12 月	ゼミ合宿誘致事業への支援 (砺波市)	3
平成 27 年 3 月	「外国の人に知ってもらいたい富山のこトバ 100 選」翻訳支援 (富山商工会議所)	3

(出典：人文科学研究科小委員会にて調査)

### ●大学院生のキャリア開発

進路選択に資するよう履修モデルに大学院修了後の進路や身につけられる技能を示している (資料 1-2-15)。また、学部と共通で各種キャリアガイダンス等を実施しキャリア支援を行っている (資料 2-2-1)。さらにティーチング・アシスタントやインターンシ

## 富山大学人文科学研究科 分析項目 I

ップを通じて教員経験や就業体験を積む機会を提供している（資料 1-2-16, 1-2-17, 1-2-18）。

### 資料 1-2-15 履修モデルに示した修了後の進路・身につけられる技能

歴史文化分野（考古学）	修了後の進路	地方公共団体・公立資料館等において考古学資料の調査・研究・収集・展示・普及などを担当する研究者 大学および研究機関において考古資料の保存・修復・成分分析などを担当する高度専門技術者あるいは教員
	身につけられる技能	地域に根づく遺跡や文化財を調査・研究し、その成果を適切に保存・活用できる論理的にして実践的な能力
国際文化論分野	修了後の進路	国際交流、文化交流のリーダー（e.g. 国際交流に関わる地方公共団体などの職員）
	身につけられる技能	異文化交流に関する問題分析と企画・立案能力
心理学分野	修了後の進路	高度な心理学的専門技能および知識を必要とする職業人（e.g. 病院、児童相談所などの心理相談員）
	身につけられる技能	心理学に関する理論的かつ実践的な知見、調査・発表・討論などの実践能力、心理学上の様々な課題を探索し解決する能力
社会学・国際関係論分野（社会学）	修了後の進路	高度な社会調査の技法を必要とする社会人のスキル・アップ（社会人入学：e.g. 自治体の企画調査部門や民間企業における市場調査部門のリーダー）
	身につけられる技能	様々な社会調査の技術、その背景にある社会理論の理解、調査データの分析・解釈能力、客観的で説得力のあるレポート作成能力
ロシア言語文化分野	修了後の進路	ロシア語・ロシア文化のエキスパート（e.g. 在外公館、企業、文化施設の専門職）
	身につけられる技能	日露文化交流の架け橋となる専門的知識と言語運用能力

（出典：人文科学研究科履修の手引き（抜粋））

### 資料 1-2-16 富山大学人文学部ティーチング・アシスタントの採用に関する指針

<p style="text-align: center;">富山大学人文学部ティーチング・アシスタントの採用に関する指針</p> <p style="text-align: right;">平成 23 年 7 月 13 日制定</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 前期・後期を通じて、ティーチング・アシスタント 1 人あたり、各期の担当授業は 4 単位を超えないものとする。</li> <li>2 原則として授業科目 1 コマあたりティーチング・アシスタント 1 人とする。ただし、野外活動等の特別な配慮が必要な授業については、その旨の申請があり次第、人文科学研究科小委員会で別途対応する。</li> <li>3 対象となる授業科目は、演習・実習・講読等とし、通常の講義科目は除外するものとする。</li> <li>4 ティーチング・アシスタントは教育補助を基本業務とするものであることから、当該の大学院生の教育経歴として役立つよう配慮する。</li> </ol>	
--	--

（出典：富山大学人文学部ティーチング・アシスタントの採用に関する指針）

### 資料 1-2-17 ティーチング・アシスタントの採用状況

事 項	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
TA 採用教員数	10	13	10	8	6	2
TA の人数	9	9	7	4	4	1
授業科目数	30	22	17	7	6	4

（出典：人文学部総務課にて調査）

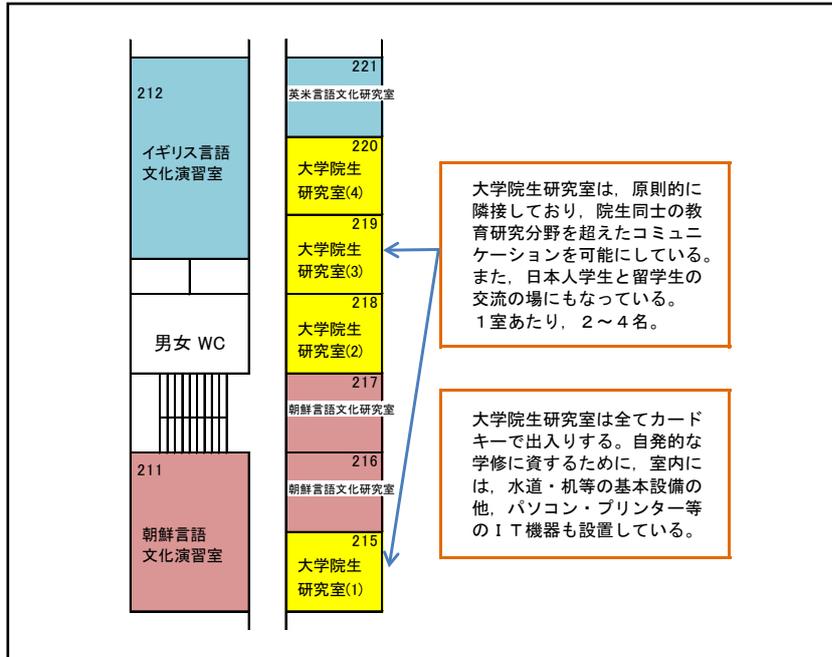
## 資料1-2-18 インターンシップ報告書

別添

## ●学修環境の整備

平成23年度から大学院生研究室を1室増やし4室とした。院生が24時間利用できるようにカードキー方式をとっており、院生が主体的に学ぶ環境が整っている（資料1-2-19）。

## 資料1-2-19 大学院生研究室整備状況



（出典：人文科学研究科小委員会にて作成）

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

以下の点で、想定する関係者の期待に十分応えている。

- ① 本研究科として3つの基本方針を策定し、それに基づいて学際的な研究と学修が可能なカリキュラムを編成し、学位取得に向けたプロセスを明示している。
- ② 改組後は、所属研究分野で専門深化型の研究指導を受けるだけでなく、研究上必要な方法論を他教育研究分野や他研究科で学んだり、副専攻的な履修により複数の分野をまたいでの研究を行うなど、幅広い教育研究分野を有する組織を活用した学際的な教育が行われている。
- ③ 地域と深くかかわる分野を中心に、アクティブで実践的な学修活動を通じて、キャリアの形成を図るとともに地域貢献にも寄与している。
- ④ 入学志願者の動向に鑑み、社会人・留学生を視野に入れた支援の充実を図っている。
- ⑤ 交流協定の締結を促進した結果、留学生が増加し、また、海外協定校への留学・研修等を通じて、国際的な研究環境ができています。国際シンポジウム等を開催し著名な研究者を招聘し講演等を行うことで、院生が国際的な研究環境で研鑽を積む機会も提供している。
- ⑥ ノンアカデミック志向の学生に対応するため、キャリア支援を行っている。
- ⑦ 大学院生専用の研究室等の研究環境を十分に整えている。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

●修士論文

本研究科の理念・目的に掲げている高度の人文科学的教養と深い人間理解を背景に、様々な課題に対処できる高度な専門的知識と学際的な識見が身につく、それを修士論文等の形で示している。

改組前は、専門深化型の論文が多かったが、平成23年度の改組によって他領域や他研究科を含む副指導教員の指導を受けられる体制をとった結果、日本語と中国語の対照、言語景観など、研究テーマが学際的な広がりをみせている(資料2-1-1)。

学位論文審査員は、主査1名、副査2名(他領域もしくは他研究科の教員も可)からなり、多様で学際的な教育研究活動を最後まで担保している。合否は、学位論文審査及び最終試験報告書に基づき研究科委員会で審議し研究科長が認定している(資料1-1-4)。

資料2-1-1 修士論文題目一覧

修了年度	専攻	教育研究分野 [研究分野]	修士論文題目
平成22年度	文化構造研究	人間学	社会契約論か、功利主義か －人権基礎論の視点から－
		人間学	祝言の世界観
		言語学	日中両言語の主題に関する対照研究 －主題成分の比較を中心に－
		心理学	臨地実習中の「指示待ち行動」をめぐる看護学生の主観的経験プロセスに関する研究
		国際文化論	日中戦争期における新馬政計画と地方の対応 －長野県の事例を中心に－
	地域文化研究	日本語学	植物方言と地域特性
		日本文学	『源氏物語』宇治十帖の研究
中国文学		漢文笑話集『胡蘆百轉』について	
平成23年度	文化構造研究	心理学	自閉性障害者の大小概念について －音楽を用いた大小概念の形成を中心として－
		考古学	弥生時代後期社会の様相 －北陸地方の集落の分析から－
		哲学	美的経験における陶酔の内実について －ニーチェ美学におけるディオニュソス的陶酔とアポロンの陶酔－
		人間学	空海の「言語」と「哲学」 －『卍字義』の世界－
		言語学	中国語の「是…的」と日本語の「ノダ」の対照研究
		考古学	日本における遺跡の整備と活用の研究 －縄文時代と弥生時代の集落遺跡を中心に－
		比較文学	三木竹二研究 －雑誌「歌舞伎」時代の功績－
	地域文化研究	日本文学	『賀古教信七墓廻』の研究
		日本文学	源俊頼詠歌の研究
		フランス言語文化	フランス語から英語への語彙の借用について －食物と料理用語を中心に－
		ロシア言語文化	マヤコフスキイの『ロスタの窓』について
文化構造	比較文学	明治四十年代の森鷗外研究 －フランス語使用について－	
	地域	ロシア言語文化 レールモントフ『現代の英雄』の創作史	

富山大学人文科学研究科 分析項目Ⅱ

平成 24 年度	文化 研究	中国文学	『他の国一只属于我們的独唱団一』からみる韓寒の批判精神
	人 文 科 学	歴史文化	「帝都」カルカッタの都市改造—スラム問題と植民地行政
		国際文化論	修信使の日本視察—朝鮮政府はどのように近代化しようとしていたか
		人文地理学	富山市中心商店街の構造変化と経営者意識
		日本言語文化	『修紫田舎源氏』の構成方法
		日本言語文化	中日の「忌み言葉」に関する社会言語学的研究 一人間の一生をめぐるタブーの中日比較—
		中国・朝鮮 言語文化	京劇《水滸戯》について
		中国・朝鮮 言語文化	漢文怪異小説の研究—石川鴻齊の『夜窓鬼談』について
フランス 言語文化	『マノンとマルグリット』の多様性—『椿姫』と比較して		
平成 25 年度	文化 構造	国際文化論	上海租界形成期における公園（競馬場） の設置・移転について
	人 文 科 学	哲学・人間学	ダンテ『新曲』地獄篇における地獄に堕ちた魂の叙述について
		歴史文化	古代における地方寺院の成立と展開 —飛驒国の事例を中心に—
		国際文化論	中国における社会保障制度の整備について —農村養老保険制度を中心に—
		日本言語文化	日本語の格助詞、後置詞と中国語の介詞の対照研究
ロシア 言語文化	ボリス・ポプラフスキーの詩に見る海のモチーフ		
平成 26 年度	人 文 科 学	国際文化論	張愛玲論—「金鎖記」を中心に—
		言語学	韓国人・中国人 日本語学習者の助詞使用 —ゼロ助詞、対象を表す格助詞「を」を中心に—
		日本言語文化	『源氏物語』の主題の深化に関する研究 —女君の道心のあり方に注目して—
		日本言語文化	日本漫画の言語学的研究
		日本言語文化	地域社会における配慮表現
		中国・朝鮮言 語文化	言語景観から見えること 江戸時代の和習意識について
平成 27 年度	人 文 科 学	歴史文化	「近世地方霊山における『観光地』的様相 —立山山麓の信仰登山集落と地域社会—
		人文地理学	「高齢者の社会空間に関する一考察 —自然環境が異なる2つの地域の比較から—
		文化人類学	「盆踊りの変容—富山県富山市無形文化財『さんさい踊り』 を事例として—
		言語学	「依頼メールの機能的要素の分析 —日本人留学生と中国人留学生のメールの比較—
		日本言語文化	『源氏物語』における明石の君の造型的意義について —その草子地に着目して—

(出典：人文学部総務課にて調査)

●就学状況

就学状況はおおむね良好であり、毎年、休学者が1～2人、退学者が0～2人である。休学の理由は留学に伴うものが最も多い(資料2-1-2)。留学した者を除き大半が標準修業年限で修了している(資料2-1-3)。

資料2-1-2 休学・退学状況

年 度	休 学 状 況			退 学 状 況		
	1年	2年	合計	1年	2年	合計
平成22年度	—	1 (留学)	1	—	—	0
平成23年度	—	2 (共に留学)	2	—	—	0
平成24年度	—	1 (留学)	1	—	—	0
平成25年度	—	1 (疾病)	1	—	—	0
平成26年度	—	2 (疾病・一身上の都合)	2	1 (進路変更)	1 (一身上の都合)	2
平成27年度	—	2 (一身上・仕事の都合)	1	—	—	0

(出典：人文学部総務課にて調査)

資料2-1-3 入学年度別留年者数

入学年度	入学者数	標準修業年限 修了者数	留年者数
平成22年度	11	8	3(1)
平成23年度	8	8	0
平成24年度	7	6	1
平成25年度	8	6	1
平成26年度	6	5	0
平成27年度	6		

留年者数の( )内数字は、留学に伴うもので内数

(出典：人文学部総務課にて調査)

●研究活動の活性化

研究発表の場を提供するために、『富山大学大学院人文科学研究科論集』を発行している。また、平成23年度から「大学院生研究成果報告会」を開催し、大学院生に様々な発想や関連知識あるいは研究手法を学び取る機会を提供してきた(資料2-1-4, 2-1-5)。

資料2-1-4 『富山大学大学院人文科学研究科論集』の発行状況

年 度	タ イ ト ル
平成22年度	「小泉八雲『常識』研究—ヘルン文庫書き込み調査から—」
	「富山県における後期旧石器人の石材獲得行動—行動の変化と背景—」
	「中世八幡信仰における神仏習合—『八幡愚同字』を中心に—」
	「謡曲と現実の世界の関係—和歌を詠む人の心を手がかりに—」
	「日中両言語における破格の主題の対象」
平成23年度	「若者のまなざしから見る富山市の中心商店街」
	「『堀川院百首和歌』における源俊頼詠歌について」
	「—『万葉集』の受容に着目して—」
	「『弓八幡』に表われる八幡大菩薩—世阿弥作の脇能『箱崎』『放生川』との比較—」
	「日本で初めての復元住居に関する—考察—復元住居黎明期についての再検証—」
	「空海の『言語』と『哲学』—『咩字義』の世界—」

富山大学人文科学研究科 分析項目Ⅱ

平成24年度	「漢文怪異小説『夜窓鬼談』—「続黄梁」について—
	「黒人女性文学を映画化することの功罪—『プッシュ』と『プレシャス』を中心に—
	「『他的国—只属于我們的独唱団—』の風刺表現」
	「仏教を興した人々の歌, 『リグヴェーダ』—インド思想の源泉—
	「京劇『十字坡』—解説と翻訳—
平成25年度	休刊
平成26年度	「飛驒における古代寺院の成立に関する一考察」
	「『降龍十八掌』と『打狗棒法』—金庸の小説の魅力—」
平成27年度	「『源氏物語』における女性論と紫上像—第一部・第二部を中心として—」
	「韓国人・中国人日本語学習者のゼロ助詞—日本人学生との日常会話から—」
	「『源氏物語』「御法」「幻」両巻における明石の君の造型的意義について—その草子地に着目して—」

(出典：人文科学研究科小委員会にて調査)

資料2-1-5 「大学院生研究成果報告会」の開催状況

年度	タイトル
平成23年度	「ニーチェの美学におけるアポロ的陶醉—観照者の美的体験に着目して—」
	「日本の遺跡の整備と活用の研究—特に縄文時代から弥生時代の集落遺跡を対象にして—」
	「三木竹二研究—雑誌『歌舞伎』の編集方針—」
	「英語におけるフランス語からの語彙借用について—食材と調理用語を中心に—」
	「源俊頼詠歌の研究—万葉撰歌を中心に—」
	「空海の言語哲学—『卍字義』の世界—」
平成24年度	「ダンテ『神曲』についての中間報告」
	「『マノン・レスコー』の多様性—『椿姫』と比較して—」
	「修信使の日本視察—朝鮮政府はどのように近代化をしようとしたか—」
	「京劇水滸伝について」
平成25年度	「『他的国—只属于我們的独唱団—』から見る韓寒の批判精神—」
	「ダンテ『神曲』地獄篇における地獄に堕ちた魂の叙述について—第一歌から第七歌を中心に—」
	「中国における社会保障制度の整備について—日本と中国の比較検討を通して—」
	「日本語の格助詞, 後置詞と中国語の介詞の対照研究」
平成26年度	「ボリス・ポプラフスキーの詩集《旗たち》における破滅の心象の描き方について」
	「韓国人・中国人日本語学習者のゼロ助詞—日本人学生との日常会話から—」
	「張愛玲論—『金鎖記』を中心に—」
	「江戸時代の『和習』意識について」
	「『源氏物語』の主題の深化に関する研究—女君の道心のあり方に着目して—」
	「言語景観から見えること—都市に見られる言語景観—」
平成27年度	「地域社会における配慮表現」
	「依頼メールの機能的要素の分析—日本人留学生と中国人留学生のメールの比較」
	「近世地方霊山における『観光地』的様相」
	「高齢者の社会空間に関する一考察」
	「盆踊りの変容—富山県富山市無形文化財『さんさい踊り』を事例として—」
	「『源氏物語』における明石の君の造型的意義について—その草子地に着目して—」

(出典：人文科学研究科小委員会にて調査)

## 富山大学人文科学研究科 分析項目Ⅱ

大学院生の大半が「富山大学大学院人文科学研究科論集」への寄稿や「大学院生研究成果報告会」での発表を行っており、その経験を活かして修了後に学会等で発表・論文投稿を行っている（資料2-1-6）。

### 資料2-1-6 学会・学術誌での論文発表状況

年度	教育研究分野 [研究分野]	氏名	タイトル	発表誌・発表学会等
平成22年度	日本語学	伊東奈徳	「石川県能登内浦地域の親族呼称とその変化」	『日本海総合研究プロジェクト研究報告5』桂書房
		永森理一郎	「北陸地区の雑煮—数量的データを使用した考察—」	『日本海総合研究プロジェクト研究報告5』桂書房
		笹原佑宜	「沿岸部から山間部にかけての方言分布の様相—『神通川流域における言語の変容』—」	『日本海総合研究プロジェクト研究報告5』桂書房
平成23年度	心理学	大蔵悦子・喜田裕子	『臨地実習中の「指示待ち行動」に関する看護学生の経験プロ』	第42回日本看護学会抄録集
平成24年度	心理学	大蔵悦子・喜田裕子	『臨地実習中の「指示待ち行動」に関する看護学生の経験プロ』	第42回日本看護学会論文集 2012
	言語学	粕谷謙治(平成21年度修了生)	「『シャッフル授業』を通しての学習支援」	『平成24年度日本語教育大会予稿集』pp.30-33
平成25年度	言語学	粕谷謙治(平成21年度修了生)	「『シャッフル授業』を通しての自立学習支援」	『平成25年度日本語教育大会予稿集』pp.41-44
平成26年度	歴史文化(考古学)	三好清超	「地方における国分寺の成立に関する一考察—飛騨国分寺跡を事例に—」	『大境』第34号、富山考古学会
	中国・朝鮮言語文化	邵磊	荻生徂徠の『文戒』について(口頭発表)	桃の会(小南一郎京大名誉教授を囲む中国文学会)第41回例会
平成27年度	言語学	山中江里子(平成26年度修了生)	韓国人・中国人日本語学習者のゼロ助詞—日本人学生との日常会話から—(口頭発表)	2015年度日本語教育学会研究集会第3回北陸地区(富山)

(出典：人文科学研究科小委員会にて調査)

本研究科の院生は留学先で優秀な成績を修めている。また、エッセイコンテストの受賞は、アカデミック・ライティングや指導教員等による論文指導により留学生の日本語運用能力が向上し、豊かな表現力が身についた証であると考えられる（資料2-1-7）。

### 資料2-1-7 受賞等

年度	受賞歴等	氏名
平成22年度	大連理工大学留学生学習優秀賞	高木雅美
平成22年度	公益財団法人とやま国際センター 平成22年度外国人住民エッセイコンテスト最優秀賞「美しい秋晴れ」	鄭音飛
平成22年度	公益財団法人とやま国際センター 平成22年度外国人住民エッセイコンテスト優秀賞「私から見た富山」	何広梅
平成22年度	公益財団法人とやま国際センター 平成22年度外国人住民エッセイコンテスト入賞「雪国」	馬 歆
平成23年度	公益財団法人とやま国際センター 平成23年度外国人住民エッセイコンテスト最優秀賞「津田さん」	聶 晶

(出典：人文科学研究科小委員会にて調査)

#### ●資格の取得

平成22～27年度在籍者のうち、3名が日本語教育能力検定試験に合格し、うち2名が日本語教育に携わっている（残り1名は在学中）。また、平成27年度は、高等学校教諭専修免許状（地理・歴史2名）、中学校教諭専修免許状（社会1名）の取得があった。

#### ●アンケート

本研究科では大学院教育の成果と課題を明らかにするため、改組直前の平成22年度末から修了予定者を対象に「大学院教育に関するアンケート」を実施するとともに、在学生や担当教員から適宜聞き取り調査を行っている（資料2-1-8-①、2-1-8-②）。

資料2-1-8-① 修了生へのアンケート調査結果・データ

①カリキュラムの満足度

回答項目	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
満足している	6	6	5	3	6	4	30
満足していない	0	1	1	0	0	0	2
どちらともいえない	3	1	2	5	1	1	13

②指導体制の満足度

回答項目	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
満足している	7	4	6	5	6	4	32
満足していない	1	2	1	0	0	0	4
どちらともいえない	1	2	1	3	1	1	9

③研究設備・研究環境の満足度

回答項目	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
満足している	3	3	7	6	7	1	27
満足していない	1	2	1	0	0	3	7
どちらともいえない	5	3	0	2	0	0	10
無回答	0	0	0	0	0	1	1

④奨学金制度の支援体制に対する満足度

回答項目	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
満足している	5	5	6	3	3	1	23
満足していない	1	1	1	1	1	0	5
どちらともいえない	3	2	1	4	3	4	17

⑤高度な専門知識が培われたか

回答項目	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
十分にできた	3	1	4	3	4	0	15
まずまずできた	3	6	4	4	3	4	24
十分ではない	0	1	0	0	0	1	2
どちらともいえない	3	0	0	1	0	0	4

⑥研究に必要な資料の読解力・分析力を高められたか (H23からの質問)

回答項目	H23	H24	H25	H26	H27	合計
十分にできた	2	3	3	4	2	14
まずまずできた	6	5	3	3	3	20
十分ではない	0	0	1	0	0	1
どちらともいえない	0	0	1	0	0	1

⑦関連分野を含めた広い視野が培われたか

回答項目	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
十分にできた	3	1	3	5	4	2	18
まずまずできた	4	5	5	2	3	3	22
十分ではない	1	2	0	0	0	0	3
どちらともいえない	1	0	0	1	0	0	2

## ⑧論文作成や研究発表に必要な実践的能力は培われたか（H23からの質問）

回答項目	H23	H24	H25	H26	H27	合計
十分にできた	2	2	4	3	1	12
まずまずできた	4	3	2	4	2	15
十分ではない	2	0	1	0	2	5
どちらともいえない	0	0	1	0	0	1
無回答	0	3	0	0	0	3

## ⑨異文化理解力や社会的な協調性は身についたか（H26からの質問）

回答項目	H26	H27	合計
十分にできた	4	1	5
まずまずできた	3	2	5
十分ではない	0	2	2
どちらともいえない	0	0	0

（出典：人文科学研究科小委員会にて調査）

## 資料2-1-8-② 修了生へのアンケート調査結果・アンケート結果総括

修了予定者向けアンケートは過去6年間に在籍した47人に送付し45人から回答を得た。

- ・改組による効果が顕著に見られたのは、以下の項目である。  
（平成23年度までを改組前→平成24年度以降を改組後として比較）
  - ②指導体制に満足しているという回答（65%→75%）。
  - ⑤高度な専門的知識涵養についての肯定的な回答（76%→93%）。
  - ⑦の広い視野の涵養に関する肯定的な回答（76%→96%）。
- また、改組を行った平成23年度に大学院生研究室の数を増やし必要な機材を設備した結果、③研究設備・研究環境に満足しているという回答が増加している（35%→75%）。
- ・その他の質問に対する回答からも、次のような良好な回答を得ている。  
（各質問を開始した年度以降の合計数を基に算出）
  - ⑥研究に必要な資料の読解力・分析力については94%が肯定的な回答であった。
  - ⑧論文作成や研究発表に必要な実践的能力の涵養については75%が肯定的な回答をしている。
  - ⑨異文化理解や社会的協調性の涵養については83%が肯定的な回答している。

以上のことから、改組による正・副の指導教員体制や領域にもとづく研究分野の連携、研究環境の整備などが少なからずその効果をあげていると分析できる。

（出典：人文科学研究科小委員会にて調査）

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

以下の点で、想定する関係者の期待に応える成果を上げている。

- ① 教育研究成果は、多様なテーマに関する修士論文として結実し、「富山大学大学院人文科学研究科論集」や「大学院生研究成果報告会」のほか、学会発表、学術雑誌への論文掲載の形で発信されている。
- ② きめ細やかな指導体制により就学状況は良好で、多くの学生が標準修業年限で修了している。
- ③ 本研究科の修了者を対象としたアンケート結果も、指導体制や広い視野の涵養、研究環境などについて高い満足度を示している。専門的な知識・能力の修得に関しては、十分であるとするものが改組後さらに増加しており、改組による連携体制の強化やカリキュラムの工夫が一定の効果をあげている。

## 観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

従来は研究者志向の者が多かったが、他研究科の博士課程へ進学する者は減少傾向にあり、大学院で身につけた高度な専門的知識や語学力と幅広い学問的見識をもって、教育関係や一般企業に就職する者が増加している。

## ● キャリア支援の取組

学部と共通で大学院修士1，2年生を対象とするキャリア支援を行っている。就職ガイダンスに始まり、卒業生を講師とする就職支援セミナーの開催や、近年の就職状況悪化への対策として「リスタート支援」等も行っている(資料2-2-1)。また、キャリアサポートセンターと連携して、留学生向けの就職支援も行っている(資料2-2-2)。インターンシップの機会も提供されている他、希望者はティーチング・アシスタントに採用されており、その経験は就業体験としても活かされている(資料1-2-17)。

資料2-2-1 キャリア支援の実施状況(平成27年度の例)

実施日	支 援 活 動
4月30日	「新入生キャリアガイダンス」の開催(1年生向け)
5月20日	「進路・就職ガイダンス」の開催(3,4年生・M1,2向け)
5月20日	就職活動リスタートガイダンス(4年生・M2向け)
5月	「就職の手引き」パンフレット等配付
7月22日	「夏休み前就職ガイダンス」の開催(3年生・M2向け)
10月	「人文学部就職情報2015(ガイダンス)」配付
10月8日	「就職支援セミナー」の開催(卒業生講師:高岡市役所)
11月18日	「就職支援セミナー」の開催(卒業生講師:立山黒部貫光(株))
12月16日	「就職支援セミナー」の開催(卒業生講師:(株)北陸銀行)
1月27日	内定者による就職活動体験報告会・座談会

(出典:人文学部総務課にて調査)

資料2-2-2 留学生と県内企業経営者の交流会

別添

## ● 就職・進学状況

就職希望者の就職率は約70%である。就職を希望しない者の中には、社会人入学者で就労中の者や家事従事者が含まれる。また、本国で就職するために帰国した留学生も含まれている(資料2-2-3)。

近年は進学者数が減っており、教育・学習支援関係を中心に様々な業種・職種に就職している(資料2-2-4)。ハノイ国家大学外国語大学の日本語教師や企業の海外事業部などで、大学院で身につけた語学力を活かして、働いているケースも少なくない。

資料2-2-3 年度別進路状況

年 度	修了者数	就職希望者数	就職者数	就職率(%)	進学者数	その他
平成22年度	8	3	2	66.7	2	3(1)
平成23年度	11	5	4	80.0	3	3(3)
平成24年度	11	8	5	62.5	1	2
平成25年度	6	4	3	75.0	0	2(1)
平成26年度	7	6	4	66.6	1	0
平成27年度	5	2	1	50.0	0	3(3)

その他欄の( )内数字は、有職者で内数

(出典:人文学部総務課にて調査)

資料2-2-4 業種別就職状況

業種	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	計
製造業	1	1					2
情報通信業						1	1
運輸業、郵便業		1					1
卸売業、小売業			1		1		2
学術研究、専門・技術サービス業			1				1
生活関連サービス業、娯楽業				1			1
教育・学習支援業	1	1	1	1	2		6
医療、福祉			1				1
サービス業				1	1		2
地方公務		1	1				2

(出典：人文学部総務課にて調査)

●業界関係者の意見聴取

本研究科の修了生は総じて能力や就業態度において業界関係者から一定の評価を得ていた。関係者が修了生に求める能力としては、高い語学力や専門性のほか、コミュニケーション能力や発想の柔軟性、好奇心、自ら問題を発見し解決していく能力等があった(資料2-2-5)。

資料2-2-5 関係者への意見聴取

業界等関係者	大学院修了生に求めるもの
運輸・商社	語学力や相手国の文化に関する知識・理解に加えて多様な文化を持つ人たちとのコミュニケーション能力。商社関係の場合それに加えて独自の発想。
ホテル	物事をよく考え謙虚であること。ストレスをプラスに転じる能力。
マスコミ	コミュニケーション能力、好奇心。目標をもって様々な体験を積む。
市町村役場等	様々な人とうまく付き合える能力や、決まった業務に囚われず、幅広い業務に対応していく発想の柔軟さ。自ら仕事を見つけていく積極性。
教育	時代や社会に流されず、自分の立ち位置を理解し、自分の基盤を作り、自分の人間力を地域に還元すること。

(出典：人文科学研究科小委員会にて聞き取り調査)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

近年は進学者が減り就職する者の割合が増加している。このようなノンアカデミック志向を受けて、平成25年度からは大学院生を対象とする手厚いキャリア支援を行っている。留学生についても就職・キャリア支援センターと連携して、留学生向けの就職支援も行っている。インターンシップの機会も提供されており、また、ティーチング・アシスタントとしての経験は就業体験としても活かされている。

留学生や社会人の増加を受けて就職志望者は減少傾向にあるが、教育・学習支援関係を中心に様々な業種・職種に就職している。また、日本語教師や海外事業部等で、大学院で身につけた語学力や専門的知識を活かして、働いている修了生も少なくない。

これらのことから、本研究科は、専門職として高度な専門性と幅広い学識・教養を身につけ、地域の発展や国際社会で活躍する人材を育成するという期待に応えていると判断できる。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

第1期に比較して、以下の点で教育活動の質が向上している。

##### ①改組の実施

平成23年度に1専攻3領域へと改組し、複数教員による指導など柔軟な連携体制を可視化した(資料1-1-1, 1-1-2, 1-1-3)。

##### ②基本方針の設定

新たに3つの基本方針を策定し、学位取得に向けたプロセスを明示した(資料1-2-1, 1-2-2, 1-2-3, 1-1-4, 1-1-5)。

##### ③学術交流協定の拡大(部局間)

海外の大学と交流協定を新たに結び、留学生の派遣・受入の幅を広げるとともに、本研究科独自の奨学金も創設し、留学支援体制を構築した。部局間交流協定は、すべて第2期中期目標・計画期間中に締結もしくは再締結されたものである(資料1-1-13, 1-1-14, 1-1-15)。

##### ④国際シンポジウムの開催促進

第1期には、国際シンポジウムの開催が少なかったが、第2期は国際シンポジウム等を数多く開催し国内外の著名な研究者を招聘することで、国際的な研究環境で研鑽を積む機会を提供した(資料1-2-11)。とりわけ平成27年度には、10のシンポジウムや講演会を開催し、国内外から著名な研究者を迎えている(資料3-1)。

資料3-1 平成27年度に開催されたシンポジウム・講演会

開催日	講演者氏名	講演の形態
平成27年5月6日	アラン・ケラ=ヴィレジェ(西洋史)・仏国リセ・ヴィクトル・ユゴー	講演会「ピエール・ロチとラフカディオ・ハーン」での講演
平成27年8月25日	加藤重広(言語学)・北海道大学	講演会「悩める日本語—正しい日本語はだれが決めるのか」での講演
平成27年10月29日	ピアッジョ・ダンジェロ(比較文学)・伯国ブラジリア大学	講演会「泣く女を巡って—ボードレール、谷崎、そして芸術」での講演
平成27年11月7日	李相揆・(韓国語学)・韓国 慶北大学	東アジア言語地理学国際シンポジウム(富山大会)での研究報告
	董忠司・(中国語学)台湾 新竹教育大学	
	沈力・(言語学)・同志社大学	
	鄭曉峯・(言語学)・台湾 中央大学	
	李仲民・(中国語学)・台湾 文化大学	
	岸江信介・(社会言語学)・徳島大学	
	大西拓一郎・(日本語学)・国立国語研究所	
平成27年11月21日	伊藤一美・NPOこども&まちネット 理事長	こども環境セミナーにて講演
平成27年11月28日	窪添慶文(東洋史)・お茶の水女子大学名誉教授	シンポジウム「分裂する中国—2つの南北朝—」での講評
平成27年12月19日	池田雅之(比較文学)・早稲田大学	講演会「小泉八雲と夏目漱石の「大きな旅」—祈りと再生の場を求めて—」での講演
平成28年2月13日	オード・デュリエル(文学)・仏国オルレアン大学	国際シンポジウム「ラフカディオ・ハーンとフランス」での基調講演
平成28年2月14日	ヒロ・ヒライ・蘭国・ラトバウド大学	国際シンポジウム「初期近代ヨーロッパの哲学とインテレクチュアル・ヒストリー」での基調講演
	リチャード・アーサー(哲学)・加国マクマスター大学	
平成28年2月14日	西原鈴子(日本語教育学)・国際交流基金日本語国際センター所長	国際シンポジウム「日本語・日本語教育研究のグローバルな担い手たち—帰国した留学生たちの今—」での講演
	モルチャノワ・リア(日本語教育学) ロシア・元リャザン国立大学	
	コルクサ・アリ・アイジャン(日本語教育学) トルコ・ネヴァイシヒル大学	

(出典：人文学部総務課にて調査)

##### ⑤社会人・留学生の受け入れ促進

社会人に対して新たに平成24年度からは長期履修制度を導入し、留学生に対しては、アカデミック・ライティング指導を行い、指定校推薦入学の協定を結んだ(資

料 1-1-22, 1-1-19, 1-1-13)。

⑥キャリア支援

ノンアカデミック志向の院生の増加を受けて、特に平成 25 年度からは留学生も含めて大学院生を対象とした手厚いキャリア支援を行っている（資料 1-2-15, 1-2-16, 1-2-17, 1-2-18, 2-2-1, 2-2-2）。

⑦環境整備

院生室を 1 室増やして 4 室用意した他、カードキーを導入し 24 時間利用可能な研究環境を整えた（資料 1-2-19）。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

第 1 期に比較して、以下の点で教育活動の成果の状況が改善されている。

①院生報告会

学位取得に向けた体系的なカリキュラムのもとで行われた教育活動の成果発表の場として、従来の『富山大学大学院人文科学研究科論集』に加え、平成 23 年度からは「大学院生研究成果報告会」を開催した。それが学会での口頭発表や論文掲載に結び付いている（資料 2-1-4, 2-1-5, 2-1-6）。

②就学状況

留年・休学・退学数が減少し、就学状況の改善がみられる（資料 3-2）。

資料 3-2 留年・休学・退学数

事 項	留年	休学	退学
第一期 (H16-21) 年度平均件数	4.17	2.50	0.83
第二期 (H22-27) 年度平均件数	1.50	1.50	0.33

(出典：人文学部総務課にて調査)

③アンケート調査

毎年修了生を対象としたアンケート調査を行い教育成果等を検証した結果、改組や研究環境の整備がその効果をあげていることを確認した（資料 2-1-8-①, 2-1-8-②）。

④キャリア支援

ノンアカデミック志向を受けて、キャリア支援を行った結果、修了生は地元自治体や教育関係、一般企業等多様な業種で働いている。中には大学院で身につけた語学力や専門的知識を活かして、日本語教師や企業の海外事業部等で働いている修了生も少なくない（資料 2-2-1, 1-2-10, 2-2-4）。